

刀をかえて聖書に 新島襄と聖書

鈴木範久 すまきのりひさ 立教大学名誉教授

新島襄、内村鑑三、柏木義円、住谷天来……、いずれも今の群馬県にゆかりのあるキリスト者である。群馬県議会は、一八八二（明治一五）年、全国に先駆け廃娼を決議した。当時の議会には、湯浅治郎をはじめ数名のキリスト信徒がいた。その一群をふくめ、ここに名前を挙げた人々は、いずれも新島襄の影響なしには語られない。

新島襄は、蘭学を学んでいた二十歳のころ、日本語に訳されたロビンソン・クルーソー物語や、ブリッジマン（Bridgman, Elijah C.）によって書かれたアメリカの歴史地理書を友人から借りて読む。前者は『漂流紀事』、後者は『連邦志略』とみられる。

前者の『漂流紀事』には、旧約聖書

コライには聖書を教えるつもりはあったが、青年の夢は海外にあった。ひそかに外国船で函館を脱出、上海に向かう途中、船員から聖書を借りて読む。聖書と出会い、まるで帰郷して父母に逢った思いと感激する。

いよいよ上海からアメリカ船に乗る。途中、香港で中国語訳聖書を買おうとしたが、日本の金は通用しない。一本残っていた小さい方の刀を船長に買ってもらい、ようやく念願の聖書を手。航海中、船長から英文の聖書も与えられた。

新島は、中国語訳聖書から次の言葉を日記に書き写したとされている（『新島研究』28）。

蓋神愛世甚至以其独生之子賜之俾凡信之者免沈淪而得永生



新島襄



愛用の聖書と書きこみ（徳富蘇峰「新島襄先生」より）

のアブラハム、ヨセフの話が登場、苦難にあつて時を待つ心得が説かれている（ちなみに立教大学所蔵の故・海老沢有道氏旧蔵『文明源流叢書』には、同書に収録された『漂流紀事』のこの部分に、氏による傍線が付されている）。

（けだし神世を愛し甚だしきはその独生之子をもつてこれに賜うに至る。およそこれを信する者をして沈淪を免れて永生を得せしむ）

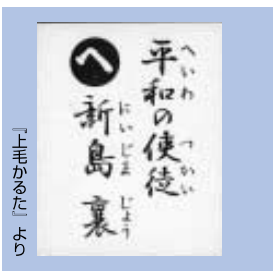
新約聖書ヨハネ伝三章一六節の言葉である。この中国語訳聖書の言葉は、前述のアメリカ人宣教師ブリッジマンとカルバートソン（Culbertson, Michael S.）共訳の『新約全書』のものと同じである。これまた新島にとっては、『連邦志略』以来のブリッジマンとの再会である。のちに新島が記した中国語訳聖書の言葉をみると、ほとんどブリッジマン・カルバートソン訳によっている。

これでも分かるように、新島は聖書の中で、とりわけヨハネ伝を愛好した。新島が説教にあたり用意したメモが残されている（『新島襄全集』二巻）。それを見ると、ヨハネ伝にもづくものが最も多く、神の愛がその中心となっている。アメリカ時代に行われた人生最初の説教も同じである。

神の愛を新島が説くとき、常に口をすっぱくして語っていることがある。そこでいう「神」は、ただの神でなく、「独一真神」の神であり、「愛」は、日本ではまったく聞いたことのない愛で

後者の『連邦志略』には、アメリカが「愛人如己」の「西教」（キリスト教）を奉じる国であると記されている。さらに、友人から中国語のキリスト教書や聖書を借りて読んだ新島は、その中で、万物を創造した「天父（Heavenly Father）」を知ったという。ただし、聖書そのものというよりは、聖書の抄訳か、マルチン（Martin, William A.P.）の著した『天道溯源』ではないか。とくに『天道溯源』には「天父」の表現が多く見られる。むしろ、まだ日本はキリスト教禁制の鎖国下に置かれていた。

それらの書物を通じて広く世界に目を向けた新島は、一八六四年、函館に行き、ニコライの日本語教師になる。ニ



「上毛かるた」より

あるという点である。聖書の訳語として「神」と「愛」とを採用したがための苦勞

といえる。

新島は、アメリカのフィリップス・アカデミー在学中の一八六六年、洗礼を受ける。このとき、友人から英文の聖書を贈られた。欽定訳聖書（AV）であり、一生を通じ愛用の聖書になる。没後、同書を遺族から譲り受けた徳富蘇峰によると、新島はこれを常に愛用した。

説教の草案などの書き込み、朱点、緑点、黒線などが随所にみられ、三面にほどこされた金箔は剥落して、あたかも金閣寺の天井のようであるという。のちに同書は同志社に寄贈された（徳富蘇峰「新島襄先生」同志社、一九五五）。

新島はこの聖書の見返しに、「此道や（須臾不可離乃道なり）冥途の旅乃導灯（アカリ）かな」と記している。すなわち聖書は、瞬時も身から離すことのできない教えであり、一生を照らす導きの光とされた。